

3-56

24

590425

松本記録

昭和二十五年十月  
遺族より提供を受く

日清修好條規通商章程改正問題

(明治六年—二十一年)

外務省

P.V.M. 1

324

2-1 245 |

590426

上ノ官吏ヨリ免許無レハ品物ヲ卸スヘカラス日  
没ヨリ日出迄ノ間ハ船上ノ荷物ヲ納ルル場所  
ノ入口ヲ税関ヨリ封鎖スヘシ若シ私ニ開ク者有  
ラハ犯ス毎ニ洋銀六拾元ヲ罰スヘシト載セタリ嗣  
後華商ノ船日本各口ニ到ル時ハ應サニ此章  
ヲ遵守スヘシ(同上)

右ノ外務片犯案ノ罰款及修好條規第九條ノ文義ヲ  
解説シテ該地方官ヨリ清民ノ犯科ヲ日本法傳ヲ照シ

外務省

385

P.V.M. 1

326

4

松本記録

昭和二十五年十月  
遺族より提供を受く

船舶貿易規則中ニ日没ヨリ日出迄ノ間ハ

外務省

384

P.V.M. 1

325

修ノ筋改正スヘシ  
(彼照覆文)  
日本ト外國トノ貿易規則中ニ出港ヲ願フ船々  
ハ二十四時前ニ埠上所へ告知スヘシト載セタリ  
嗣後華商ノ船日本各口ニ在リ此管海守形  
船切手等ヲ銷取ニハ應サニ此期限ヲ照スヘシ  
(同上)

2-1245

2-1 245

				<p>外務省</p>			<p>明治九年一月廿日</p>	<p>森 有紀</p>	<p>道候也</p>	<p>致向中ニ有之不日議定交換ニ可至候條先此段申</p>	<p>三ヲ知断スル儀ハ彼力所答不都合ナルヲ以テ既ニ</p>
--	--	--	--	------------	--	--	-----------------	-------------	------------	------------------------------	-------------------------------

386

P.V.M. 1

327

24 總理衙門王大臣等御臨辦代辦公使宛

光緒二十一年一月十八日 付

(明治九年三月十二日)

條約補關二閱スル再應照會ニ付各條

款ニ付照覆ノ件

大清欽命總理各國事務王大臣 為

照復事光緒元年十月初三日 前准

貴署大臣照覆內稱七條內尚須商妥之款開列

外務省

387

P.V.M. 1

328

於左等因前來本王大臣等經行文北洋李大臣  
飭屬核議治復再由本衙門查核定議會  
經先行照復茲據李大臣飭屬核議治復  
前來本王大臣查前准  
貴署大臣來文內稱因議復交通關章帶敘  
條規德行補正各款原期屆年議正此次照答  
因通例除海關應行變通章程照第三章一  
款隨時照會商辦外其餘事宜本可毋庸豫為

外務省

388

P.V.M. 1

329

一本王大臣前次照復曾以中國尚未派有領事官  
故商定暫行章程俾有依拠所有七條內尚須  
商妥之處復加核走開列於左

一 來文內稱華商運貨抵口始末載驗口單內日  
後報閱起岸除徵本稅外另照數倍罰算因  
查驗口單失載更正本訂有專條茲既聲明在  
二十四點鐘期限之後起岸補報情形概有不同  
嗣後華商運貨如將失載驗口單及報單之

外務省

389

P.V.M. 1

330

貨於更正期限之內補報完稅者應免議罰  
倘過期不報由關查估或運至貨物起岸驗  
行補報者除徵本稅外另照稅數罰加一倍其假  
造驗口單及報單者每次罰洋一百五十元倘以  
貴物藏入賤貨之內作賤貨報關係屬捏報  
者應將貨物入官所有中國各海關仍按舊章  
辦理一語概即刪除

外務省

390

P.V.M. 1

331

一 語即改為俟重修條規之日議定

一 未文內稱鴉片報關封鎖入驗其成規逕延仍  
 依成規為妥如另設法不致沾染則與西約  
 一律照辦等因本查鴉片禁令原恐日民沾染若  
 船載之貨不准起岸華民吸食者令其回華  
 則日民自不致於沾染今擬仍照西約一律辦理  
 凡三餉以外照章查驗毀棄其私載者員者  
 每斤照章罰洋十五元不得加重倍罰以昭

外務省

391

P.V.M. 1.

332

333

平允嗣後如查有食烟華民不准上岸近溜  
 即令回華以免日民沾染而今兩國友誼  
 一 未文內據第七條中國未設理事官以前華民在  
 日本者與日本人涉訟或犯日本法紀暫由地方官  
 會同華領司事秉公評斷必不可行竊因查  
 交隣久遠睦為先聽訟以民服為要從前中  
 東未立修規粵人在日本犯罪曾經外務省  
 辦罪案備文知照中國具徵隣誼茲換約修

外務省

392

P.V.M. 1.

333

2-1 2 4 5

好以彼華人犯案因中國領事官未到即由日本  
地方官審斷科罪既其條規第九條不合亦恐  
無以折服華人之心若由日本地方官與華領事  
會審或有未便今擬華人與日本人涉訟暫  
由日本地方官傳案訊明仍准華民邀集華領  
司事仿照西國之舉公人到堂觀審日本地方  
官應將如何審斷擬結錄由當眾曉諭倘  
公議有未允協定華人與華領司事赴日本上司

外務省

393

P.V.M. 1

334

牛門控告由該管上司復核訊問一面備文詳  
叙經由知照日本駐華領事官轉告中國地方官  
查為倘華人受辱亦准用中國地方官領內申訴  
照會日本駐華領事轉請日本外務大臣派員復  
審或由中國人派員前往會審隨時隨事其  
酌免辦如華人不犯條規第十三條所載為匪  
等情不得拘禁刑訊亦不得凌虐刻待倘華人  
與華人交涉之事與日本人無干者日本地方官

外務省

394

P.V.M. 1

335

2-1245

590431

應令華智司事受理此傳暫行章程一俟中  
 國派出理事官即將理事官料斷以符定章  
 以上數條均經本五大臣詳加復核恐恐妥善相德  
 照復  
 貴署大臣即希  
 查照見復以便彙同前定數條刊附通行為此照  
 復須至照會日有  
 右 照 會日

外務省

395

P.V.M. 1

336

337

338

大日本國前署駐京全權大臣鄭  
 光緒二年正月拾捌日

外務省

396

P.V.M. 1

337

2-1245



250 森公使ヨリ總理衙門王大臣宛

明治七年二月十日 付

(在本邦清民ノ民刑事件審斷ニ付暫行章程

ヲ設ケルニ及ハス高擧ニ依リ地方官ニ於テ審辦

スハ才旨照會ノ件)

大日本國總差金權大臣森照會ノ厚メニスル事明治九

年二月十二日貴王大臣ヨリ前署大臣郵へ致セル復文

ヲ接閱ス由ニ本國閱章ヲ核定セシ數條ヲ開

外務省

3917

P.V.M. 1

338

878

878

ニ差越サレタリ本大臣查スルニ運賃ノ補報及ヒ

鴉片禁斷ノ罰款已ニ妥協ニ至ルヲ除クノ外清民

其日本人ノ涉訟ハ皆今日本官ヨリ其德へ呼出シテ

説明シ猶其清民へ仲間ノ頭人ヲ同道シテ西園兼

公人ノ如ク公堂ニ到リ審問ノ次第ヲ旁觀セシムル

ヲ准ルニ其地方官ハ其地方官ハ其審斷擬結セシ録

由ヲ以テ象人へ曉諭シ差シ公議未タ協ハサル有ラハ

上司ノ案内へ赴テ控告シ其上司ヨリ復核訊問スル

外務省

398

P.V.M. 1

339

フ陸ルセトノ趣ヲ述ヘラレタリ我本國ニ在テハ紳商  
 ニ刑清クシテ凡ソ涉訟有レハ内外人良ヲ輸スル無  
 ク是ノ如ク辦理セサルナシ此レ即チ訟ヲ聽ク猶  
 人ノフトクシ捕ミテ友邦ニ及ホスノ意ニシテ何ソ  
 人ノ言フヲ待タレヤ況ヤ我國ノ地方官ヨリ犯事清  
 民ヲ審辨スル事從前歷々業概有テ本ヨリ彼此  
 ノ信誼ニ由レリ換約ノ際ニ至リ及テ亦先後發明  
 マ經國ヨリ暫行ノ事ト爲シ己ニハ公文ヲ立テ清國ヲ

外務省

399

P.V.M. 1

340

リ理事官ヲ派シ來ラハ其審斷セシ書類ヲ借リ抄  
 シ地方官へ一切ノ事情ヲ諮詢セシム筈ノ語ヲ議  
 定シテ案ニ在リ而ルニ今中國尙未タ理事官ヲ派  
 セサルヲ以テ暫行ノ章程ヲ立ント擬セラルルハ目  
 前ノ物ヲ遣レタルカ如シ何ソ彼此更ニ煩勞ヲ添  
 ルヲ痛シヤ終ニ高貴ニ仰リ兩國ノ信誼ヲ全セ  
 シニハ如カサルノミ此レ貴王大臣ノ查照ヲ希フ頃ク  
 照會者ニ至ルヘシ也

外務省

400

P.V.M. 1

341

590434

大清欽命總理各國事務大臣人照會

明治九年二月十五日

外務省

40/

P.V.M. 1

342

2-1245



590435

倘公議有未協、准赴上司呈內控告、由該上司  
 復核訊問一節、在我本國、律高刑清、凡  
 有涉訟、無論內外人民、莫不如是辦理、此即  
 聽訟猶人地及友邦之意、何併人言、以我國地方  
 官、審辦犯事清民、從前雖有案牘、本由  
 彼此信誼、至及換約之際、亦經先後說明、固屬  
 暫行之事、已立公文議定、俟中國派理事官來  
 借抄卷宗、向地方官諮詢一切等語在案、而

外務省

403

P.V.M. 1

344

(右譯漢文)  
 為照會事、明治廿年正月十日、接閱  
 貴王大臣致前署大臣郵之復文、內開核定本國關  
 章數條用未、本大臣查、除運貨補報及鴉片  
 例禁各四款已妥協外、所稱華人與日本人涉訟  
 暫由日本官備案訊明、仍准華民邀集華智司  
 事、仿照西國之集公人、到堂觀審、該地  
 方官、將其審斷擬結條由、當眾曉諭、

外務省

402

P.V.M. 1

343

2-1 245

378  
3  
3

今以中國未尚設有膠東官、擬立暫行章程、似  
屬騎牛舞牛、何庸彼此更添煩勞、終不如仍  
舊貫、今兩國信館員、此布、  
貴王大臣查照、須至照會者、

外務省

404

P.V.M. 1

345

2-1245



26 在清森公使ヨリ致島外務大輔宛

明治二十二年三月十七日

付

(條約補缺ニ関シ従前抄復シタル照會文書)

送附ノ件)

去月十八日附第二號ノ公信昨十五日接到黑田辦理大臣去月九日神戸出帆封納ノ向ク航海奔島外務卿使世死云其外官員涉抄復夫々致領知候一日請條約補缺ノ儀今度有礼着燕ノ上取調候

外務省

405

P.V.M. 1

346

此本有ノ原意僅ニ所要ノ條々ヲ鈔畧工掛合給ニ可致ヲ指令書上一ニ文意ノ由カサルヨリ前代理公使ニ終ニ別冊ノ通段々郵重ノ照會ニ及候義始テ指分リ候因テ(1) 郵ノ末文(2) 郵ノ通リ照覆致尤今ニ意ノ抄復ヲ經サレハ金備ニ不至得共先ツ従前抄復シタル文書ヲ取揃致呈覽候

右旁申送候也

外務省

406

P.V.M. 1

347

590437

									敎 邊 外 務 大 輔 殿		明 治 九 年 二 月 十 七 日								在 北 京
--	--	--	--	--	--	--	--	--	---------------------------------	--	---	--	--	--	--	--	--	--	-------------

外  
務  
省

4017

P.V.M. 1

348

2-1 2 4 5

0020

590438

二拜 同月十九日	宛答文
郵代理公使ヨリ總理兼内大臣	宛照會
(長ノ照會ヲ削改シ日付ハ前)	
同探九月四日トシテ答文ニ添	
(送附シタルモノ)	
總理兼内大臣ヨリ郵代理	
公使宛答文	
本拜 同月十九日	

外務省

429

P.V.M. 1

350

一拜 同月十九日	使宛照覆
總理兼内大臣ヨリ郵代理公	
照會	
郵代理公使ヨリ總理兼内大臣宛	
揚記シアルヲ以テ省路ス	
從前修復シタル照會文等ハ左ノ通ニテ既ニ前ニ夫々	
(編者註)	

外務省

428

P.V.M. 1

349

2-1 245



373

ト	同	年	十一月	廿八日	卸付	瑞公使	より	総理	内	王	照覆
大臣	苑	照會									
少	同	年	十一月	一日	総理	内	王	より	卸付	瑞公	使苑照覆
リ	同	年	十一月	十二日	同	上					
又	同	年	二月	十五日	森公	使	より	総理	内	王	大臣
苑	照會										

外務省

4/a

P.V.M. 1

351

2-1245



27 總理衙門大臣ヨリ森公使宛

光緒二十八年八月 付

(明治二十三年三月三日)

清民審斷ノ件ハ修好條約第九條規定ノ如ク

理事官ヲ派セサル間ハ地方官ノ約束照料

ニ帰スルコトニ異存ナク旨回答ノ件

大清欽命總理各國事務 王大臣 傷

照會事、光緒二十八年正月二十日、准

外務省

411

P.V.M. 1

352

貴大臣照會、内稱接閱貴王大臣致外務大臣  
 郵之復文内開、核定本國関章數條前來、  
 本大臣查、除運貨補報及鴉片烟例禁各罰  
 款已妥協外、所稱華人共謀人涉訟、暫由日  
 本官傳案訊明、仍准華民邀集華領事司  
 事、仿照西國之業公人到堂觀審、該地官  
 將其審斷擬結經由當衆曉諭、備公議  
 有未允協、准赴上司衙門控告、由該上司復

外務省

412

P.V.M. 1

353

核訊問一節、以中國倘未取有理事官擬  
 立暫行章程、似屬駭牛野牛何角彼此更  
 務煩勞、終不如仍舊費金兩國信館等因前  
 末、本王大臣查、修好條規第九條內載、  
 兩國指定各口、倘未設理事官、其貿易人民  
 均歸地方官約束照料等語、今  
 貴大臣既云不知仍舊費、自係遵照第九條修  
 好條規內載各口未設理事官、貿易人民均

外務省

413

P.V.M. 1

354

歸地方官約束照料之言、不敢或改、以期兩國  
 人民相安、用照信市兩國印文、除由本衙門咨  
 行北洋大臣查照外、相應照會  
 貴大臣查照可也、須至照會者、  
 右 照 會  
 大皇國欽派駐京全權大臣木村  
 光 緒 三 年 二 月 初 八 日

外務省

414

P.V.M. 1

355

(右知譯)

照會スル爲メノ事光緒二年正月廿一日(我九年二月十  
 五日)貴大臣ノ照會ヲ接收ス其内ニ貴大臣ヨリ前署  
 大臣郵へ致セル復文ヲ接閱スルニ内ニ核定セシ  
 本國税関規則数條ヲ認メ越サレタルヲ本大臣查  
 スル其運賃ノ補報據片例禁錮ノ罰款已ニ妥協  
 ニ至レル外申越セシ清人與日本人ノ涉訟ハ尙  
 分日本官ヨリ其意へ呼出シテ訊明シ猶其清民

外務省

415

P.V.M. 1

356

仲間ノ頭人ヲ同道ニテ西列衆公人ノ如ク公  
 堂ニ到リ審問ノ次第ヲ旁觀セシムルヲ得ルシ  
 其地方官ハ其審斷擬結セシ理由ヲ以テ衆人へ  
 曉諭シ若シ公議未タ成ハサル有テハ上司ノ爲  
 へ赴テ控告シ其上司ヨリ復核訊問スルヲ准ルセ  
 トハ一併ハ今請願ヨリ未タ理事官ヲ派出セサル  
 トテ暫行ノ章程ヲ立ント擬セラルルハ目前ノ物  
 ヲ遺レタルカ如シ何ソ彼此更ニ煩勞ヲ添ルヲ希シ

外務省

416

P.V.M. 1

357

ヤ終ニ舊貫ニ仍リ兩國ノ信誼ヲ全クセシムルニ由ラス  
 トノ趣ヲ申越レタリ本大臣查スルニ修好條規第  
 九條内ニ兩國指定メタル各口ハ若シ未タ理事官  
 ヲ設ケスハ其人民貿易トモ地方官ノ約束照料ニ  
 帰スル等ノ語ヲ載セタリ今貴大臣既ニ舊貫ニ  
 仍ルニ由カスト云ハル國ヨリ修好條規第九條内ニ  
 各口ハ未タ理事官ヲ設ケスハ人民貿易トモ地方  
 官ノ約束照料ニ帰スルトノ言ヲ遵照スラ致テ

外務省

417

P.V.M. 1

358

更改アラズ以テ兩國人民ヲ相安トセシム其信守ヲ  
 昭カニシテ抑ノ交ヲ固クスルノ旨趣ナルヘシ右一本  
 案内ヨリ北洋大臣ハ心得ノタメ掛合越候外此段貴  
 大臣ハ照會シテ査照ニ備ヘ候也

外務省

418

P.V.M. 1

359

28 ○在清森公使ヨリ寺島外務卿宛

明治九年三月八日付

(日清條約補關ニ関スル談判要略ノ旨報告件)

第十二號

日清條約補關ノ事(中略)凡ソ我ニ所要ノ箇條誤  
判妥協ニ至リ其中兩國人民涉訟ノ箇條元別  
紙ノ通談判事(中略)ヨリ回答有之是ニテ結末ニ至  
候右補關ノ條々ヲ兩政府打合せ本條約ノ附

外務省

419

P.V.M. 1

360

8  
5

1  
1

録ノ体ニ致シテ布告スルヲ要ナリトセハ別段御

指令ヲ待テ夫々処分可致候得共本使ノ考ル所

ニシハ其手數ヲ爲スニ及ハス唯我開港場ノ稅

及法官等ニ補關ノ條ヲ御告示相成候得ハ

不足リ申スヘク尤去八年十二月芝罘公信第一號ノ

第三號カ)ヲ以テ申進置候日清兩國ノミニ

リ奉スル所ノ物品ノ輸出入無稅事及極類

清國(輸入スル事)付ト先ツ本議章ト由談

外務省

420

P.V.M. 1

361

590444

判ヲ送ケ之ヲ公然確定スルヲ得タルノ上右ノ條約  
附録ヲ造ルノ期ニ至ラハ前ノ補闕ノ條ニ其附  
録中ニ加ヘ然ル可クト存候

右補闕ノ條額別無遺漏結末ニ至候ハ前代  
理公使御氏格別勵精ノ力ニ由候

次第ニ付相与ノ御賞下賜候様有之度候也

在北京

五月三日八日

森

有 札

外務省

P.V.M. 1 362

421

外務省

外務省

P.V.M. 1 363

422

2-1 245

590445

翰者誌

別紙八前項ニ掲ケタル三月三日付總理事内主大  
臣ヨリ本紙公便宛照會ニ付直略ス

外務省

423

P.V.M. 1

364

2-1245

3  
3  
3  
3





590446

ニ本條約附錄第八條載ニ及問敷ト相考候條  
 丈々右ノ取針ニ降守可及在候將由國所產物品  
 ノ内互ニ無稅通関ノ儀并ニ塩類等ノ儀ニ付云  
 々ノ舊臘二十五號信ヲ次申通候通尚詳細ノ  
 末示ヲ併可及決答候 (教略)

外務省

425

P.V.M. 1

366

(右 回答)

29 青島外務卿ヨリ在清森公使宛

明治卅四年四月十日付

第十一號

(前略)

貴信第十二號ヲ以テ御申越有之候日清條約補  
 欲ノ件結局ニ相成候ニ付公布方ノ儀ハ御末示  
 ノ内我各關港場海関并諸官等ハ相達置候上

外務省

424

P.V.M. 1

365

2-1 245

590447

外無之作併當時森金權公使北京派弟二付同使  
 より算卜談判ニ可及尚御申越有之然ルニ其後該  
 條約ニ付テハ實地統々不都合有之再三般問ヨリ  
 申出殊ニ右直高章程等ニ至テハ實ニ不明瞭ニ  
 シテ文意難解甚困難ノ場合不少候処今般同公使  
 帰朝ニ付テハ何角彼地ニ於テ談判有之候哉詳知  
 致度若未而談判不相整義ニ候ハハ何年互急御  
 談判ノ輝ニ相成候様致度右ハ目下ノ御都合互急

外務省

427

P.V.M. 1

368

30 天隈大藏卿ヨリ寺島外務卿宛  
 明治九年九月十九日 付  
 (日清條約不明瞭ノ條ニ付森公使談判ノ  
 結果問合ノ件)  
 清國條約書不明瞭ニシテ實際取扱方困難ノ  
 義ニ付テハ各歳中屢々及御通儀候処右ハ算  
 卜而談判ノ上ナラテハ御改正難相成趣大迄ノ処ハ  
 候令不都合有之候共條約知文ニ依リ取扱候

外務省

426

P.V.M. 1

367

2-1 245

378  
3  
3

承知致度此段御借使考尚及御照會候也

明治九年五月十九日

大藏卿 大隈重信

外務卿 青島素則殿

外務省

428

P.V.M. 1 369

2-1 245



年七月十五日甲第七十六號ヲ以テ在北京臨時代理  
 公使鄭永壽ヲシテ彼政府へ照會ノ儀指令案  
 相同同月十八日同ノ通御指令相済同人へ申  
 達シ清國政府へ照會ノ未別紙ノ通リ照覆有之  
 候依テ従前ノ疑問ヲ掲ケ有議ト右照覆  
 中疑問ニ適当スル答鏡トヲ挿入シ差出候條開  
 港場各機關於テ右照覆文等ヲ以憑拠トナシ  
 收撥事務措置候様大藏省へ御下命相成

外務省

430

P.V.M. 1

371

甲第九十号  
 清國通商章程中歐米諸洲ト日本トノ通商章程  
 ニ比較候得ル誤誤又ハ脱漏ノ條款有之明治八  
 年九月十日  
 果報告並右ニ基テ税関事務措辦ノ義大  
 藏省へ下命方申ノ件  
 明治九年六月二十日付  
 日清條約補闕ノ件ニ付清國政府へ交渉ノ始

外務省

429

P.V.M. 1

370

2-1245

590449

後此段上申候也

明治九年六月十五日 外務卿 青島 宗則

大政大臣 三條 實美 殿

上中ノ趣聞届其旨大藏省(相達)候事

明治九年八月十五日

外務省

431

P.V.M. 1

372

2-1 245



590450

同
後華商販運貨物進出日本各口應照西國
一律中國各口仍按舊章辦理
東文進口稅則譯漢文第八十三條駝布類第
四不紀因非珠列等因查不紀因洋言奏也
非珠列有花也既係譯漢錯誤應將第
四不紀因非珠列作為非珠列阿庫吐俟
重修章程改正

外務省

433

P.V.M. 1

374

(別紙)
○照覆
光緒二十九年十月廿九日照覆
一東文前訂通商章程第八款載進出口稅
一律等因查日本與英美各國統立稅則章程
第一款載明出口貨未列出口稅則不得以進口
稅則為例進口貨未列進口稅則不得以出口
稅則為例均照每百稅五之例納稅等語嗣

外務省

432

P.V.M. 1

373

2-1245

590451

同
理
一東支貿易規則內載商船進口自日入至日出
等因查日本與英美各國訂通商章程
第二款內載自日落至日出止若非海關應
允不得起貨船上載貨物自日落至日出
止由關封鎖若有開者每次罰洋六十元等語
嗣後華商船隻到日本各口應即遵守

外務省

435

P.V.M. 1

376

同

同
一東支前訂通商章程第八款內載商船完
清稅項海關發給紅單理事官接致紅單即
發給牌准其出口等因查日本與英美諸
國訂通商章程第四款內載商船隻領
牌出口應於二十四點鐘之先報關次日領
牌等語嗣後華商船隻在日本各口領牌
應即照此期限中國各海關仍按舊章辦

外務省

434

P.V.M. 1

375

2-1245

0036

590452

免護罰

倘逾期不報由閩查處或遲至貨物起岸始行  
補報者除徵本稅外另照稅數罰加一倍其  
做造船口單及報單者每次罰洋一百五十元倘  
以貴物藏入賤貨之內作賤貨報關係屬捏  
報者應將貨物入官

同

一乘文內稱鴉片報關封鎖入船共成規送他仍

外務省

437

P.V.M. 1

378

此章俟重修條規之日議定  
光緒三年正月十八日照覆

一乘文內稱華商運貨抵口始未載船口單  
內日後報關起岸除徵本稅外另照稅數罰  
穿因查船口單欠載更正本訂有專條茲既  
明在二十四點鐘期限之後起岸補報情形  
有不同嗣後華商運貨如將欠載船口單  
及報單之貨於更正期限之內補報完稅者

外務省

436

P.V.M. 1

377

2-1 245



590453

金兩國友誼

外務省

439

P.V.M. 1

380

彼成規係安如另設法不致沾染則其西約  
 一律應辦等因查鴉片禁令原恐日民沾染  
 若船載之貨不堪起岸華民吸食者令其  
 回華則日民自不致於沾染今擬仍照西約一  
 律辦理凡三勛以外照章查拏毀棄其  
 私載者賣者每斤照章罰洋十元不得加罰  
 倍罰以昭平允嗣後如查有食烟華民不  
 得上岸逗留即令回華以免日民沾染而

外務省

438

P.V.M. 1

379

2-1 245

別アリ大ニ殊ナリ孰レヲ以テ眞ト認ムハキヤ  
 省議  
 隠ハ「カクス」漏ハ「ヌカス」ノ意ナリ漏報トハ  
 届クヘキ管ノ荷物ヲ届ケ又事ニテヌカス  
 義ナリ即チ隠クスト事案ハ「ニ」帰ス程  
 報トハ荷高カ或ハ品柄ヲ有体ニ届ケ  
 ス事ヲシテ届クルヲ云報テ著チ漏カシ  
 タルハ伏報ノ字ヲ用フ様ニ清英天津條約

外務省

441

P.V.M. 1

382

(別紙三)

○疑問、省議、答説  
 通商章程第五款疑問  
 品高ヲ隠サハ其品税銀ノ高ヲ罰ス各因章  
 程ニ概レハ其品ヲ没取スルナリ重税ヲ課スルニ  
 アラス然レトモ漢文ヲ見ルニ漏報トアリ隠スノ義  
 見(ス蓋シ漏報ト隠ト義) 目錄ニ遺漏セシモ  
 一ハ重税一故意取隠スモノハ其品没收一自ラ

外務省

440

P.V.M. 1

381

590455

外  
 國條約中荷物ノ中積荷目録中ニ載サル品及  
 フ取隠シ置收納ヲ減セリト謀ル者ハ其品  
 フ日本役所ニ取上クヘシトイフ箇條ハ日清  
 條約中歟也ニテ是レヲ同條約中第七  
 款免狀ヲ受スニテ自儘ニ荷揚セハ揚タル  
 荷物ヲ官ニ取揚セ云々ノ箇條中へ混淆シタ  
 ルニ似タリ然ルニ光緒三年五月十八日照覆中  
 其假違曉口單及報單者毎次罰洋一百二十

外務省

443

P.V.M. 1

384

三十七款浦報摺報ノ字見エ英文ニ撰レハ  
 偽ノ者書トアリテ浦報兩字ヲ一意ニ歸シ  
 テ別譯ナシ然ルニ此日清條約ニハ日本ニ  
 テハ隠セシ者ニ其品税銀ノ高ヲ罰ストアリ  
 テ日本ト各外國條約ノ罰則中ナル積荷目録  
 者書中ニ載サル品ヲ陸揚スルニ於テハ其  
 品ニ重ノ運上ヲ日本役場ニ納ムヘシト云箇  
 條ニ引來リテ罰則甚輕ク且日本ト歐西各

外務省

442

P.V.M. 1

383

2-1245

3-56

5

590456

松本記録

昭和二十五年十月  
遣族より提供を受く

日清修好條規通商章程改正問題

(明治六年—二十一年)

外務省

P.V.M. 1

385

2-1245



590457

蓋シ此「無税」ノ字船内備用即自用品ニシテ其  
 税ヲ納ムルニ及ハサルモノヲサシテ謂ヒシナラン  
 カルル所ハ「並ニ無税」ノ行文解シ難シ  
 有議  
 疑問ノ議ニ異ナルナシ余ク行文晦澁ヨリ生  
 セシ誤ナリ然レトモ今是ヲ改正スルニ及ハ  
 ス

外務省

445

P.V.M. 1

387

松本記録

昭和二十五年十月  
遺族より提供を受く

5

第六款  
 船中自用品ヲ「無税」ノ品(中品)之ヲ賣物ニ爲  
 サハ猶規則ノ通税ヲ納ムヘシ「無税」ノ物品ハ  
 之ヲ賣却スルモ爲メニ税銀ヲ納ムルノ務ナシ  
 五元備以賣物藏入賤貨之内作賤貨取扱  
 係属取扱者應將此貨物入寄トアレハ此條  
 ノ誤誤ヲ補正スヘシ

外務省

444

P.V.M. 1

386

2-1245

●  
●  
●  
●

第八款

納税相済之ハ海関ヨリ皆済ノ守形ヲ出スヘシ此  
皆済守形トハ出港免状ヲサシテ留シカ辨タ別  
ニ皆済守形ナルモアリヤ

省議

出口免状ニ異ナルナリ則日本領不利條約質  
易章程第四則中既ニ其文義ヲ見ル

外務省

446 P.V.M. 1 388

2-1 245



第十二款

税則ニ載セサル貨物ト雖トモ「イソウフェイス」  
 ルモノアリ強クニ税官ニ其物ヲ評価シ之ヲ買取ル  
 ノ理アラシヤ直シク「イソウフェイス」ノ真像ヲ鑿  
 定シ其真ナルモノハ従價税ノ結末「除以上各項  
 外所未載名物類」亦此例ノ件ニ扱テ知分シ  
 テ可ナラシ然ラハ此一款ハ其真ナラサルモノノ爲  
 ニ辨ニ設ケシモノリヤ若知ラハ「税則ニ載セサル」ノ

外務省

447 P.V.M. 1 389

2-1245



590459

ハ其調子粗行「届タレトモ其以前ハ」イソウ  
 フイ込「迄檢閲シテ價格ヲ評定シタル事  
 ナク日本歐西各國條約中「イソウフイ込」ニ好  
 曲アルト知ル時ハ税関官員其眞價ヲ  
 定メテ其品買上ノ額判ヲ爲スヘシトハ掲  
 載セス且清國税関ノ取扱ハ如何ニカ知ル  
 ハカラス故ニ本條ノ文明白ナラスト雖トモ掲  
 載シテ書スルカ如シ

外務省

449

P.V.M. 1

391

字解ニ難シ

省議

税則ニ載セサルノ字體考ナラス然レトモ後價  
 税目ノ末尾「附」上各項「云々」数字ハ日本海  
 関税目ノ末尾ニ掲載シアルトモ清國海関  
 税目ノ末尾ニハ記載ナク先則オレハ右ノ数  
 字ハ約証トナスニ足ラス且「イソウフイ込」ニ  
 概テ元價ヲ鑿定スル事日本ニテモ止来

外務省

448

P.V.M. 1

390

2-1 245





590460

是ニテ明カナリ

及報甲者毎次割洋銀一百五十元トアレハ

ニ及ハス且別紙照會文中其假造船口等

第十三款

概銀取立ノ節故障申立可カラス概銀トハ俾

頭稅ノ類ニテアルカ此一款解ニ難シ

首議

外務省

451

P.V.M. 1 393

從來日本ト歐米條約書中積荷目録ヲニヘ

ストヲ出スヘシト云ケ條アレトモインウライ

区ヲ出シ且元價ノ倍リナキヲ保証スルノ條

ナシ只新定約書元價ニ倍セ五分ノ稅ヲ出

スヘシト云條アル而已故ニ今ヨリ支那船日

本各港ニ來ルアル元「インウライ」区ヲ出シ元價

ヲ証明セシムルハ支那領事ト議ニテ稅額

ノ實例ニ從ハシムヘシ條約中ニ追加スル

外務省

450

P.V.M. 1 392

2-1 245

590461

照此例ト相矛盾スルニ依タリ其意解ニ難シ  
 者議  
 清ト歐洲各國通商章程善後條約第一款  
 ニ本文ノ如キ條例有リテ清ト各國トノ商約  
 ハ本文ノ如キ定則ト見ヘタリ然レハ日本人於清  
 國通商貿易スルハ本文ノ定則ニ遵守セザ  
 ルヲ得ス然レトモ日本ニ來ル清民ハ本文ノ  
 定則ヲ準許スルヲ得ス正ニ日本ト歐西各國

外務省

453

P.V.M. 1 395

埠頭税ノ如キモノナラシ我現ニ其設ナレハ今ハ  
 虚文ニ属ス  
 第三十八款  
 輸入税則ノミヲ載セテ輸出税則ヲ載セサルモノ  
 ハ其品ヲ輸出スル時都テ輸入税則ニ引合ニ此章  
 各國章程(新條約第一款)ト相及シ且本書從  
 價税ノ結末(除以上各項外所未載名物類亦

外務省

452

P.V.M. 1 394

2-1 245

590462

日本各國德照西國一律中國各口仍按  
 舊章辦理トアレハ爾後ハ此條ヲ憲批トシ  
 三收稅スヘシ  
 漢譯本稅則八十三條棉布中ノ第四不札因非  
 疎列トハ非疎列阿連此ノ誤リナラン蓋シ不札因  
 トハ無效ノ稱ナリ  
 本文ノ誤ニ異ナルトシ乃光緒元年十月廿九日照復  
 中ニ

外務省

456 P.V.M. 1 397

條約ノ趣旨ト方針ス光緒元年十月廿九日照  
 覆中ニ  
 一 束文前訂通商章程第三十八款載進出口  
 稅一律等因查日本英英美各國統立稅  
 則章程第一款載明出口貨未列出口稅則不  
 得以進口稅則爲例進口貨未列進口稅則  
 不得以出口稅則爲例均照每百稅五之例  
 納稅等語嗣後華商販運貨物進出

外務省

457 P.V.M. 1 396

2-1 245

590403

光緒元年十月廿五日ノ照覆文中ニ  
 一 東支貿易規則内載南船進口自日入至日  
 出等因查日本英英美各國初  
 訂通商章程第二款内載自日落至日  
 出止若非  
 海關應允不得起貨船上載貨  
 船口自日  
 落至日出止由關封鎖若有私  
 開者每次罰  
 洋六十元等語嗣後華商船隻  
 到日本各  
 口應即遵此章程俟後修條規  
 之日議定

外務省

458

P.V.M. 1

399

一 東支進口稅則譯漢文第十三條  
 既布類  
 第四不紀因非珠列等因查不  
 紀因譯音義  
 也非珠列有花也既係譯漢  
 錯誤應將第四  
 不紀因非珠列作為非珠列  
 阿連吐俟後修  
 章程時改正トコリ  
 日設ヨリ日由ミテハ船口其  
 他貨物ノ納場ヲ鎖シ  
 或ハ封シ若シ之ヲ破開セハ  
 墨銀六十元ヲ罰スルノ  
 一條ヲ缺ク

外務省

457

P.V.M. 1

398

2-1 245

0049

590464

諸國初訂通商章程第四款內載船隻領  
 牌出口應於二十四點鐘之先報關次日領  
 牌等語嗣後華商船隻在日本各口領  
 牌應即照此期限中國各海關仍按舊  
 章辦理  
 何片ノ輸入ヲ嚴禁トシ且其密商ヲ謀ル者等  
 一 條ヲ缺ク  
 省議

外務省

460

P.V.M. 1 401

トアリ是ニ憑拠シテ処置スヘシ  
 出港古シト欲スル船舶ハ二十四時前其届書ヲ海關  
 ニ呈スルノ一 條ヲ缺ク  
 光緒元年十月廿九日照覆文中ニ  
 一 來文前訂通商章程第八款內載商船定清  
 稅項海關發給紅單理事官接到紅單  
 即發給牌准其出口等因查日本英美

外務省

459

P.V.M. 1 400

2-1245

0050

590465

原恐日民沾課若船載之貨不堪起岸華  
 民吸食者令其同華則日民自不致於沾課  
 今擬仍照西約一律辦理凡三船以外照舊查  
 拏銀乘其私載每斤賣者每斤照章四割  
 洋十五元不得加多他割以照平允嗣後如  
 查有食烟華民不准上岸運烟即令同華  
 以免日民沾課而令兩國友誼トアリ

外務省

462

P.V.M. 1

403

日本海關稅則第三條違禁物項鴉片ヲ載  
 ルト雖只禁制目ニ掲載スル而已ニシテ其  
 罰則モナク且歐西各條約書ノ如ク斤量ノ制  
 限モナク權此一項而已ニシテ不足ナリ光緒二年  
 正月十八日照覆中ニ  
 一東文內稱鴉片報關封鎖入驗其成規迄  
 延仍從成規俟後如另設法不致沾課  
 則此西約一律照辦等因案查鴉片禁令

外務省

461

P.V.M. 1

402

2-1 245

590466

ル処ノ土産輸入ノ取扱法是ナリ抑モ天然ノ産物ハ  
 輸入税ヲ廢止ストモ經濟ノ害ニアラス且ツ日清  
 兩國ノ交際ヲ一層進ルノ目的ヲ以テ茲ニ別紙特  
 約案ヲ編シ候間森金様公使出發迄ノ内可否  
 御決議有之度此段及上申候也

九月十日十二日 外務卿 青島 宗則

大政大臣 三條 美殿

外務省

464

P.V.M. 1

405

32 〇青島外務卿ヨリ三條大政大臣宛

明治廿年十月十三日 付

(日清兩國土産品互輸入税廢止ノ條約取  
 結ノ儀ニ付申ノ件)

清國貿易ハ現今將來我國ノ最モ緊要ト爲  
 ス知タルハ因テリ辨ラ俟タス今ヤ其端稍開  
 タリト雖モ障妨尚多クシテ其業進ム事能ハス  
 其障妨ノ最タル者ノ一ハ乃チ兩國政府ニ於テ設

外務省

463

P.V.M. 1

404

2-1245





(別紙)

大日本國特約案  
大清國

某年月日正シク日本國政府ノ特旨ヲ受タル在  
清國日本特命全權公使森有紀閣下ト正シク  
清國政府ノ特旨ヲ受タル清國總理外國事務  
大臣某閣下トノ間ニ訂結シタル約書

第一條

附録ノ目次中ニ掲タル各貨ニシテ現ニ日本或ハ

外務省

466

P.V.M. 1 407

清國ノ物産ニ係ルモノハ自今以後此約書ノ  
約款ニ遵ヒ日本或ハ清國ノ各開港場ハ輸入  
税ヲ納メスニシテクヲ輸入スルヲ得ヘシ尤輸出  
ノ港ニ在留セル輸入國ノ領事ニテ輸出國ノ現  
貨タル旨ヲ証明セシ捺印ノ證書ヲ輸入港ノ税  
関ニ差出スヘシ若シ領事不在留セサル時ハ輸出  
港税関長官ノ證書ヲ次ニスヘシ

第二條

外務省

467

P.V.M. 1 408

附録ノ目次ニ掲タル品物ト雖モ此約書ノ  
 第一條ニ記セル証書ナクシテ彼此ノ罰内ニ輸入  
 スル各貨ハ現在其輸入國ニ行ハレアル輸入税目ニ  
 照シテ收税スヘシ

第三條

従前雙方ニテ訂結セシ舊條約乃至舊約書ノ中  
 ニ在ル各款中多ク此約書ノ各款ト相抵触スル者  
 或ハ相齟齬スル者ヲ存シ此約書ノ各款ヲ以

外務省

468 P.V.M. 1 409

ラ之ニ代ヘシ

第四條

右ノ特約實際施行ノ間ハ永ク日清兩國ノ政府  
 及ヒ人民正使ニ之ヲ遵守スヘシ但シ雙方ノ協議  
 ニ依テ何時ヲ論セス之ヲ改正シ若シ協議ニ至ラサ  
 ルトモ此政府ヨリ彼政府ニ六箇月前豫メ通知  
 ノ上之ヲ廢棄スルヲ得ヘシ

外務省

469 P.V.M. 1 410

2-1 245

590469

附録

清國(輸出)工品及半輸入工品

品名

乾鮑、鮑貝、茯苓、桂皮、棕櫚皮、  
 鷓鴣、鹿、鹿角、前海鼠、銀木、  
 椿茸、特丹皮、五升芋、枝昆布、刺昆  
 布、菜粉、鱈鱈、乾海老、葉烟草、  
 蜜蠟、銅、黃連、人參、半夏、黃

外務省

470 P.V.M. 1 411

柏、磁銅、乾貝、牛皮、木材、鹿茸、  
 樹木、禽獸

外務省

471 P.V.M. 1 412

2-1245



590470

品名

○清國より輸入天工品及半輸入工品類

燧石、石羔、牛角、鹿角、生牛皮、犀角

蹄、象牙紅樹皮、青銅、亞鉛、胡椒

木菴、簾、大黃、白檀、蘇木、紫梗

人參、麝香、沈香、泊天藍、甘炒、龍

甲、紫檀木、紅毛、麻、糝子、木材

玉倍子、禽獸、魚皮、桂皮、蜂蜜、山

外務省

472 P.V.M. 1 413

奈、眞珠、茯苓、鹿茸、石類

外務省

473 P.V.M. 1 414

2-1 245

0057

33 〇森公使ヨリ青島外務卿宛

明治廿五年十月三日 付

(日清兩國人民彼此居住國ノ法律裁判ニ服従スル特約締結ニ関シ上申ノ件)

別信

兼テ所申陳ノ日清兩國人民ハ彼此居住國ノ法律裁判ニ可從儀上海品川總領事モ異存無之至極都合可直段申出候然レトモ此改革ヲ行フ前二兩

外務省

474

P.V.M. 1

415

國政府ニ於テ預メ商定スヘキ者ハ罪狀未決ノ者ヲ入牢スヘカラサル事罪狀既決ノ者入牢ノ後苛虐ノ取扱アル可ラサル事罪狀ヲ糺スニ拷問ノ法ヲ用フ可ラサル事罪狀未決ノ者ハソレ此法ヲ用ヒ拘留ヲ免ルヲ得ヘキ事案ノ件々ナリ此事件ニ付尚品川總領事員以上申スル儀モ可有之夫是御答酌ノ上司法卿ノ核覆正院ノ許可ヲ經テ御答被下候ハ前奉日清土產輸入免稅ノ件ト共ニ總

外務省

475

P.V.M. 1

416

590472

大臣へ及會議度此殿申請候也

明治九年十一月三日

森 金権公使

青島外務御殿

外務省

476

P.V.M. 1

417

2-1245

0059

御申越ノ品元可有之條承知致候一休修好條  
 規所掲ノ目追々取調候処増多少ノ不便ヲ見  
 出候就中第八條兩國高民交渉案ニ付理事  
 官應先爲勸息使不成訟如或不能則照會  
 地方官會同公平訊斷云々ト有之右ハ我國トノ  
 成約面也ニ無之英清條約中ニ元第十六十七二款  
 二八年審判會同審判第一字條有之既ニ現  
 在上海ニ會審衙門設立各國在費ノ人民皆

外務省

477

P.V.M. 1

419

34 ○青島外務卿ヨリ森公使宛  
 明治十年五月十七日付  
 清國理事官ノ會同審判ヲ避ル爲修好條  
 規ノ補缺的協定取結方ニ関スル件  
 以別信申達候陳ニ三月十七日附第五鄂別信首  
 略(中日清修好條規内不都合ノ條有之候ニ付  
 總理衙門工部引合様云々申達候処第十鄂別信  
 首略)ヲ以御回答ノ趣伺レ總署(御照復ノ上増

外務省

477

P.V.M. 1

418

590474

然ニ付其場合ニ臨ミ修好條規通りノ処置ニ相成  
候節ハ彼此交渉ノ件ハ我公庭ニ彼ヨリ會同審判  
ノ官員差出候様ヲ有スヘキ事猶我領事ノ上  
海會審堂内ニ終ルカ如ク可相成ハ必至ノ勢ニ  
御座候様右様ノ運ニ相成候ハ隨テ他各國ニ  
及ヒ城外行權大柄ノミナラス又一層ノ殊典ヲ  
受共候様ニ可相成哉ト預慮候ハ何分難  
捨置被相考候右ハ其大端ヲ等候事ニテ猶

外務省

480

P.V.M. 1

421

子  
8

8  
8

ルモノナリ以テ數フヘキニ至リ隨テ有之候処彼  
理事官未仕候之間ハ第九條我地方官ノ約束  
照料ニ歸候節助ニ付暫時無障礙被存候ヘ共亦  
ハ使モ未航可致隨テ理事官モ未仕可有之ハ尚

該約束ニ遵行候事ニ候得共他國ニハ清國正  
東航候モ而已ニテ自國ニ引受候事然之縱令  
引受候トモ城外權ノ成約然之候間右條款聊  
力差支然之候得共我開港場ニハ清民ノ未仕久  
ルモノナリ以テ數フヘキニ至リ隨テ有之候処彼  
理事官未仕候之間ハ第九條我地方官ノ約束  
照料ニ歸候節助ニ付暫時無障礙被存候ヘ共亦  
ハ使モ未航可致隨テ理事官モ未仕可有之ハ尚

外務省

479

P.V.M. 1

420

2-1 245





590476

履行スルモノハ其最近ノ所約ニ據リ各國一般ノ辦法ヲ用ヒ中外相安ニシテノ間言ナシ願フニ清國ニ在リテモ亦心然ルモノアルヘシ是ニ依テ再日清間所約ノ條規ヲ照スニ又迭々米歐各國ト相約スルモノト差池アルヲ見ル今ヤ清國ノ欲差方ニ我朝ニ東ラントシ理幸官モ差波アルヘキヲ聞ケリ西國ノ交誼將ニ益親ク益固ク人民ノ東涉亦益多ク益繁カラントス隨テ兩國相交渉スル件

外務省

484

P.V.M. 1

425

別紙

○森公使へ訓條

特命全權公使 森 有札

我國ノ友ヲ外國ニ通スルヤ米利幹ニ叙リ次クニ英法荷魯日ヲ以テス而獨乙燠地利其他ノ大國皆其後ニ在リ其條約ノ時款ニ同シカラズ國情時勢亦隨テ殊ナレハ約款中未タ彼ニ備ササルモノ既ニ此ニ備スルモノアリ頗ル差セリトイヘトモ現在實際ニ

外務省

483

P.V.M. 1

424

2-1 245

590477

國ニ在ルモノト同股ノ取扱ヲ受ケル事ヲ其莫  
ス能ク此旨ヲ体シ懇親ノ意ヲ以テ然レ  
内奏下或ハ暗黙或ハ折簡相商議ニ兩意  
洽協同ノ時ニ至ラハ文書相照ニ以テ他日ノ  
二充條規ノ缺ヲ補フヘキヲ期シ便宜処  
有之事。

明治十年五月十七日

外務卿 青島 常則

外務省

486

P.V.M. 1

427

蓋日月ニシテ益増殖セントス此時ニテ  
平ヲ裁スルニ兩國間所約ノ條規ニ據  
ス然レテ他締盟各國トソノ軌ヲ一  
モノコトニ存スルアルハ交際上頗  
政村ニ在テハ清官清高ノ我ニ在  
米歐各國官民ノ我ニ在ルモノト  
事理ニ各外國官民ノ互ニ差ナキ  
元我官民ノ清國ニ在ルモノモ亦各  
外務省

外務省

485

P.V.M. 1

426

2-1245

0064

590478

フシテ各其居住地方ノ法律ニ服従セシム候様相  
 定メ度就テハ兩國ニテ預メ抄寛ノ弊ヲ防ク  
 カ爲メ保釋法依証斷罪法及其他寛裕ナル條件  
 ヲ約定スルハ國民保護上緊要ノ事ニ候尚又特約  
 案第三款以下掲載ノ通り土宜輸入ノ義ハ既  
 ニ先般同條ニ候得共未雨間ノ結約ニ列ラサル  
 毛ノニ付此度前款ト併テ約定致度候御決議  
 一上ハ森特命令格ハ使ハ条件シ清國政府令格

外務省

488

P.V.M. 1 429

日清兩國人民管轄權及土產輸出入ノ義ニ付別紙  
 特約案(青路)ノ通り清國政府卜約定致度  
 候兩國人民治理ノ權各本國ノ自主ニ出シ居留地  
 方ノ法律外ニ差措中候シハ不都合ニ付今後西民

外務省

487

P.V.M. 1 428

35 〇青島外務卿ヨリ大政大臣宛

明治 年 月 日

特約締結ニ関スル件

2-1245

0055

590479

タルモノナリヤ又其時期如何不明ナルモ  
考ノ爲茲ニ輯録ス

外務省

490

P.V.M. 1

431

委員卜議定約條條致及尤同一本月下旬常  
地出條赴世可致ニ付至免御指令有之度此段相同  
候也

追テ御指令濟岸人封書ニテ御下付相成度候也

編輯者誌

此同書ハ草案ノミテ日附ノ記載ナク果シ  
テ此文案通大政官へ提出シテ其ノ裁決ヲ經

外務省

489

P.V.M. 1

430

2-1245

0055

590480

居住スル地方ノ法律ニ服従セシムル爲其法律ヲ  
 行フノ手續材兩國人民ノ取運スル貨物ノ内仕方ヲ  
 設ケ互ニ輸入税ヲ免スヘキ品目等ノ義ニ付曾テ統  
 理大臣ト面議ヲ經其以即彼ヨリ締約難致旨ヲ  
 以テ一意異議ニ涉リ候得共更ニ別款申請專ノ  
 通特約を精相添及照會日候知即別款乙野專  
 ノ通碍難ノ件之既ニ説明ヲ經タレハ更ニ辯論  
 ヲ要セス兩國從來ノ條規規則ニ依リ処分スルヲ

外務省

492

P.V.M. 1

433

先般貴命ヲ奉セシ空清兩國通商ノ人民各々其  
 公債第三十三號  
 交渉ノ模様報告ノ件  
 無難輸入ノ締約締結方ニ付總理生内ト  
 (日清兩國間ニ居住地ノ法律ニ服従並土產品  
 同 年十二月十三日 受  
 明治十年十月 三日 付  
 36 〇在清森公使ヨリ青島外務卿宛

外務省

491

P.V.M. 1

432

2-1 245

590481

一都合ニ書リ行文ノ間修性原稿ト支書  
 一々候件无有之候得共全篇ノ主義聊力  
 相違世之候爲念申述候也

外務省

494

P.V.M. 1

435

知好ノ書ト爲ス云々其書稿ヲ併テ照覆イタシ  
 候尚不日然署ハ抵リ充分論駁ヲ遂ケ必竟前  
 條ノ旨趣徹底候様飽マテ盡力可致心得ニ候  
 此段及申答候也

明治十年十一月三日

全權公使 森有札

外務卿 寺島 宗則殿

再白別冊特約原稿中ニ記載スル各款翻譯

外務省

493

P.V.M. 1

434

2-1 245

0058

590482

ヲ輸入スル者へ其納税ヲ免ルニ鄰國上ヨリ此查  
 処アル事ヲ知ラシメ候様致度ト及候候処貴王  
 大臣ヨリ此意ハ尤ノ事トスレトモ餘リ修好條規  
 ヲ遵服スヘクト答諾有之候茲ニ兩國特約ノ  
 巻摺一冊ヲ書キ綴リ公文ヲ以テ貴王大臣へ照會  
 ス抑モ此ノ特約ハ愈々兩國ノ好誼ヲ増シ以テ彼  
 此人民ノ生業ヲ進メ大ニ從前ノ修好條規ヲ潤  
 色ス可ク且ツ各外國ノ條約ニ関シ貴國ノ不便ヲ

外務省

496

P.V.M. 1

437

別紙甲  
 照會  
 大日本國欽差全權大臣森及照會日候事去月本大  
 臣歸伊貴王大臣へ拜禮ノ節日清兩國互ニ欽使  
 ヲ派シテ駐京候ニ就テハ將來愈々共ニ友睦ヲ致  
 スルタメ今度兩國ノ間ニ別段特約ヲ定メ彼此  
 修業人民へ均ク其各所修地方ノ法律ニ歸シテ自由  
 ノ業ヲ営ム事ヲ許ルニ且各自本國土產ノ貨物

外務省

495

P.V.M. 1

436

2-1 245

0059





(右漢譯文)

爲照會事、貴王大臣、告以日清兩國各派欽使、酌定、現  
擬兩國另訂特約、俾聽彼此修來人民、均  
歸其所佔地方法律、自由營業、並予運各  
該本國土產進口者、便其完稅、俾知鄰誼  
有此益處等語、貴王大臣、應非不美、還須遵照修好條

外務省

規、茲將兩國特約底稿一冊、備文照會、  
貴王大臣、抑此特約、是係愈增兩國好誼、  
以進彼此人民事業、大可潤色從前條規、  
斷非關於別國條約、致生  
貴國不便者、希即查照、核覆可也、須  
至照會者、(附送約稿一冊)

外務省

2-1 245

別紙乙

照會

大清欽命總理各國事務王大臣

為

照覆事光緒三年九月二十七日准

貴大臣照稱現擬兩國另訂特約准聽彼此

往來人民均歸所住地方法律並予揮各該

本國土產進口者免其完稅茲繕特約底稿

一冊備文會等因前來本王大臣查前共

外務省

500 P.V.M. 1 441

貴大臣照面時條聞此議已深悉

貴大臣一番用意惟其中礙難之處業經詳細

說明茲准前因其礙難情形自已無須復贅

徒滋辯論然之兩國辦事既有條規章程稅

則可循彼此止意遵行弗渝即為同教和好

之使

貴大臣素照睦誼必能原諒此情也所有特

約底稿一冊謹以奉繳希貴大臣查照可

外務省

501 P.V.M. 1 442

590485

也須至照會者

右照會 附特約稿一本

大日本國欽差大臣杏林

光緒參年拾月貳拾

日

外務省

502

P.V.M. 1

443

2-1245



590486

ニ付カス。

第二款

彼此ノ人民、既ニ其ノ各居住セル地方ノ法律ニ服スルニ因リ、兩國政府、共ニ法律ヲ行ラノ手續ヲ寬ニシ、且寛大ノ懲罰ヲ免レシメント爲メ、左ノ條件ヲセツル、

第一、罪狀未タ分明ナラサル犯者ヲ繋留スルニ當リ、本人自ラ保釋ヲ請ヒ、該地方

外務省

594

P.V.M. 1

445

〃 〃 〃

大清

○大日本清國特約条約

大日本國駐清特命全權公使森

今茲ニ特約ヲ會議

シテ、約定セシ條款ヲ左ニ開列ス

第一款

日兩國ノ人民ハ、嗣後公使領事其屬員及ヒ海陸武官ヲ除クノ外、其ノ各居住セル地方ノ法律ニ服從シ、禁制ニ違ハサル業ヲ営ムハ、其自由

外務省

503

P.V.M. 1

444

2-1245

590487

レニハルモノヲ云フ

二 裁判官ハ、被告人ノ自ラ保釋ヲ請ヒ敢テ逃匿セサル事ヲ誓フトキハ、其罪状ノ輕重身家ノ貧富ヲ分別シ、相当ノ保証金額ヲ定メ、之ヲ本國ノ領事ニ預クサセ、更ニ領事ヨリ其証明ヲ取り、直クニ釋放スヘシ。

三 領事ハ、保証金ヲ預リ、請ケ合フ處

外務省

546

P.V.M. 1

447

8 8 8

裁判官ノ量定セル若干金數ニ遵ヒ、其港地ニ在ル本國ノ領事ハ預ク、敢テ逃匿セサル事ヲ誓ヒ、並ニ領事ヨリ、該地ノ裁判官或ハ長官ヘ證書ヲ出シ、之ヲ保明スル時ハ、本人繫留ヲ免ルルヲ得ヘシ。

三 茲ニ保釋條例ノ細目ヲ誌ス。

一 保釋トハ、告発ニ就キ、被告人ヲシテ

三 金ヲ出シ、審訊中ノ繫留ヲ免

外務省

505

P.V.M. 1

446

2-1 245

590488

五 被告人保釋ヲ輕ルノ後逃走セシ者ハ、  
 脱監越獄ヲ以テ論シ、本罪ニテ併  
 フ加ヘ、仍ホ保証金ヲ官ニ没ス、  
 六 被告人ノ出シタル保証金ハ、裁判官没  
 受ル時ニ還付スルモノトス、  
 七 裁判官若シハ警署ヲ懐殊ニテ、保釋  
 ヲ准ササル時ハ、故禁禁<sup>禁</sup>罪人律  
 ヲ以テ論ス、

外務省

508

P.V.M. 1

449

外務省

四 被告人裁判所ノ呼出ニ隨テ出頭セザルト  
 中ハ、直チニ之ヲ逮捕セシメ、再セ保釋  
 ヲ請フ事ヲ准ルサス、並ニ保証金ヲ  
 官ニ没ス、但シ劇病等ノ事故アリ、  
 實ニ出頭シ難キ者ハ、此ノ限ニ在ラス、  
 七ハ、裁判所ヨリ被告人ヲ呼出ストキ、  
 其本人ヲ何時ニシモ出頭セシムルノ責ニ  
 付スヘシ、

外務省

507

P.V.M. 1

448

2-1245

0075

590489

上告シ取消ヲ求メト欲スル者ハ、隨意ニ之  
 ヲ爲スヲ得ヘシ、但シ其人未タ上告ヲ爲スノ期  
 路ヲ熟識セサル時ハ、即チ其本国ノ領事及  
 ヒ駐在ノ公使等ヘ訴ヘ、地方長官ヘ轉者シ、  
 或ハ直チニ其國ノ政府ヘ照會シ、之ヲ申盡  
 スル事ヲ請カスヘシ  
 第四、罪犯ヲ懲辦スルニハ、止夕贖罪、禁獄、  
 懲役、ノ法ヲ用ヒ、笞杖徒流等ノ法ヲ用

外務省

5/0

P.V.M. 1

451

・ ・ ・

第三、若シ地方ノ裁判ヲ不爲ト爲シ、大審院ヘ  
 ナル囚犯ト雖トモ、之ヲ拷訊ス可ラス、  
 確鑿明白ナルヲ得ルニ至ラザルハ、如何  
 第二、裁判官罪犯ヲ審斷スルニハ、必ス証跡ノ  
 此例ニ從フテ処分ヲナスヘシ  
 或ハ本国領事、若クハ駐在ノ公使  
 へ訴フルニ、右標ノ辨解アラハ、未タ  
 凡裁判不服ヲ以テ大審院ヘ上告シ、

外務省

549

P.V.M. 1

450

・ ・ ・

2-1245



590490

六十日	買五拾銭	老月五拾銭	原省
半日	参内七拾五銭	老内貳拾五銭	五十
四日	参内	老月	四十
三日	貳内貳拾五銭	七拾五銭	三十
二十日	老月五拾銭	五拾銭	二十
一十日	七拾五銭	貳拾五銭	一十
懲役	贖罪	買金百圓	收贖
		金拾五銭	折地
例園			

5/2

P.V.M. 1

453

外務省

三三三

フル事無シ、現定ノ贖罪及七收贖ノ例園左ノ如シ

凡ソ贖罪ハ、平民過誤、失錯、連累、其他不才ニ由テ、事情憫然ス可キ者ナレバ、例園ニ照シテ、贖罪スルヲ得ルス。

凡ソ收贖ハ老中、廢疾、及七婦女ノ珍恤ス可キ者ナレバ、例園ニ照シテ收贖スルヲ得ルス

外務省

5/1

P.V.M. 1

452

2-1 245

590491

凡ソ懲役ハ、平民、老幼、婦女、癩、盲、瘠、疾者、及七無力贖フ能ハサル者ハ、監獄 則ニ服シ、分別シテ役ニ服ス、其屬工銭	十年	八拾円	三拾円	三穿
	七年	七拾円	貳拾五円	二穿
	五年	六拾円	拾五円	原流一穿
	三年	四拾五円	九圓	三年

514

P.V.M. 1

455

外務省

〃  
〃  
〃  
〃

七十日	五月拾五銭	老内七拾五銭	七十
八十日	六月	貳円	八十
九十日	六月七拾五銭	貳円貳拾五銭	九十
一百日	七月五拾銭	貳円五拾銭	一百
一年	拾五円	三月	原徒一年
一年半	貳拾貳円五拾銭	四月五拾銭	一年半
二年	三拾円	六月	二年
三年半	三拾七円五拾銭	七月五拾銭	三年半

外務省

513

P.V.M. 1

454

2-1245

590492

ナル者ハ、裁判官波ヨリ上告ニ至ル迄ノ時間  
及シ、拘留監護ノ日数ヲ、限内ニ算入スル  
事ヲ得ス、

一 凡ソ所犯極テ輕ク、罪ニ懲役十日ニ及ハ  
サル者ハ、止テ呵責シテ放免ス、

第五、凡ソ罪ニ懲役終身以上ニ該ル者ハ、兩罰  
各々高崎ノ戒例ニ依テ、本犯ヲ其他ニ在ル領  
事ニ交付シ、之ヲ其本國政府ヘ引渡シテ、懲

外務省

5/16

P.V.M. 1

457

\*\*\*

ヲ給與シ、領置スルノ法モ、亦懲罰ニ從フ、

一 凡ソ懲役ノ年月日限ハ、刑名宣告ノ日ヨリ起  
算ス、

一 凡ソ上告シテ破毀ヲ得タル罪犯、其懲役ノ  
年日数ハ、原裁判官波ノ日ヨリ起算シ、  
獄舎拘留、若クハ便宜監獄ノ日数モ懲  
役限内ニ算入ス、拘留監獄ノ日数モ本罪  
ニ過ル者ハ、直ニ放免ス、但シ上告ノ不  
当

外務省

5/15

456

\*\*\*

2-1 245

590493

但シ此ノ輸送港ニ在留セル彼國ノ領事ヨリ、約内  
 貨目ニ遵照シ輸送國ノ現存タルモノヲ証明セ  
 レ捺印ノ証書ヲ願受テ、輸入港ノ税関ニ差出ス  
 ヘシ、若シ領事不在留セル時ハ、輸出港ノ税関  
 長官ヨリ此証書ヲ給付スヘシ、  
 茲ニ兩國輸入税ヲ免ルル品目ヲ定ム左ノ如シ、  
 日本國土產貨目

- 乾鮫
- 鱈鱈
- 茯苓
- 牡丹皮
- 五升草
- 禽

外務省

5/18

P.V.M. 1

459

嗣後兩國人民ノ販運スル貨物彼此ノ海關ニ到  
 シ、此約書内ニ掲ケタル貨目中該國ノ土產ニ  
 係ル者ナレハ、均ク輸入税ヲ納ムル事ヲ免カルヘシ、  
 第三款  
 一 懲罰罰シテ其ノ罪無キ者ハ、即刻釋放  
 スヘシ。

外務省

5/17

P.V.M. 1

458

2-1245

590494

蘇皮
胡椒 真珠 鹿角 藤條 紅花 白檀 蹄
犀角 麝香 禽獸
膏 石林 山奈 蜂蜜
牛皮 紫梗 木材 甘草 蘇米 牛角 石
香 五倍子 鮫皮 樟子 茯苓 龜茸 步

外務省

590

P.V.M. 1

461

清國土產貨目

沈香 紅樹皮 龜甲 亞鉛 人參 麝香
大黃 桂皮 紫檀木 象牙 青銅 木香
乾海兔 人參 蜜蠟 銀杏 樹木
夏毛皮 木材
黃柏 鹿茸 梅茸 刻昆布 礬銅 羊
錫 黃連 鹿角 葉烟草 板昆布 銅
獸 鮑貝 桂皮 棕呂皮 菜樟子 煎海鼠

外務省

519

P.V.M. 1

460

2-1245

0082

590495

フ可シ。

第六款

此約書ヨリ既ニ實際施行スレハ、南西國ノ政府及  
 ヒ人民等、永遠鐵道ニ之ヲ遵守スヘシ、若シ  
 嗣後孰レカ改正スヘキ事有ラハ、何等ヲ輸セズ  
 均ク協議変更ス可ク、若シ此商議妥協ニ至ラ  
 サル時ハ、此政府ヨリ彼政府ヘ、右箇月ノ前豫  
 告會ヲ召集、期日ヲ定メテ其事ヲ條約

外務省

522 P.V.M. 1 463

第四款

貨目中ニ掲ケタル品物ト雖トモ、第三款ニ定  
 メタル証書ナクシテ彼此ノ國内ニ輸入セハ、從  
 前行ハレタル輸入税目ニ照シテ收税スヘシ。

第五款

從前兩國ニテ約定セル條規章程等ノ各款由ニ、  
 若シ今度ノ特約ニ因テ相抵觸スル者ハ、悉ク  
 変更ヲ爲シ、即チ此約書ノ各款ヲ以テ換ヘ行

外務省

521 P.V.M. 1 462

2-1 245

外務省

スルヲ得ヘシ、此ノ條々兩國全權大臣此約ヲ訂  
定シ、蓋押印シテ施行セリ。

明治十年 月 日 印 押

光緒三年 月 日 印 押

外務省

523

P.V.M. 1 . 464

2-1245

0004

370 在清森公使ヨリ者島外務卿宛

明治十一年三月 二日付

同 年三月十日發

(日清兩國間締結約締結ノ交渉遷延ノ事

情ニ関スル件)

十一年別信第一號

日清兩國ノ人民兩國ノ口岸ニ寄付スル者ヲ知令  
スルノ法則並ニ兩國人民ノ運搬スル貨物中兩

外務省

524 P.V.M. 1

465

國ノ土產ニ係ル者ハ均ク輸入税ヲ納ムルヲ免スル  
特約鐵道ノ儀者年中總理大臣ト面議照會自共ニ  
要領ヲ不得尙飽迄談判ニ奉答ノ日趣貫  
徹極探盡力可致段曾ヲ申達置候所其後清  
國欽使何如豫算我國ハ拒着ノ上此件ニ関  
シ申立候情狀ヲ察シ且当地稅務長官タル英  
國人赫達氏ナル者清政府ニ於テ各國ト議事  
アル無ニ必陰ニ之ヲ參畫シ殊ニ稅務ニ関スル

外務省

525 P.V.M. 1

466



件ニ至テハ專ラ其歩張スル所ニテ修ク之カ妨礙ヲ  
 彼リ候ニ付清政府ニ欲スト欲スルハ先ツ此人ヲ  
 我方ニ誘入ル以テ守初メト考定シ先頃ヨリ已ニ  
 其場ヲ開キ居候所同人等一斷ノ休暇ヲ乞ヒ止  
 日帰國可致趣依テハ若今彼此共ニ同人ノ開  
 涉ヲ絶テ且何如璋等ニ於テモ未タ何等ノ議モ  
 相聞エス候ニ付尚不日再ヒ清政府ニ向ヒ十分  
 ノ談判ヲ書込シ候様可致候因テ昨十一月已來

外務省

526 P.V.M. 1 467

遷延曠日ノ所及ヲ略陳明仕候也

明治十一年三月二日 北京 森 有礼

青島 外務卿殿

外務省

527 P.V.M. 1 468

590498

38 ○在清森公使ヨリ青島外務卿宛

明治十一年三月十九日付

(日清兩國間特約締結交渉ニ関スル件)

別紙第二號

日清兩國特約ノ義昨午十八日總理衙門ニ到リ  
各大臣ニ面接シ先ツ別紙(一)號節略ヲ示シ  
因テ(二)號略記ノ通り及該別紙間均ク抄録  
呈覽候尚彼ノ答復ヲ俾候上更ニ回明可致

外務省

588 P.V.M. 1 469

候

右申答候也

北京

森有紀

明治十一年三月十九日

青島外務卿殿

外務省

589 P.V.M. 1 470

2-1245

別紙一紙

(本林の使費書)

特約の儀ニ付再意談論ニ及フ使費書

各冬照會文ヲ以テ兩國別段ニ特約ヲ結ヒタク  
請求セシニ續テ貴王大臣ノ照復ニ兩國ノ間ニ  
三事ヲ辨スルニハ既ニ條規章程規則ノ照準  
スヘキモノ有リ彼此只タ之ヲ遵守シテ替ハラサ  
ルコソ即チ同ク和好ヲ敦クスルノ要ト可申

外務省

530 P.V.M. 1 471

云々ヲ申越サレタリ隨テ右往復ノ書類ヲ照録シ  
テ本省へ回報セシ後過日外務大臣ヨリノ指示ニ特  
約ノ儀規則及ハレタル書類ヲ取調ヘシニ清政  
符始メノ標ハ尤ナル事ト見做シナカラ期ノ如ク條  
規ヲ墨守シテ株ヲ用ヒラレヌハ修好ト云フノ要  
ヲ失ヘルモノ如ク本卿大臣殊ニ了解難敷仍  
テ閣下ヨリ再意討論ニ及ハレ各詳答復アレトノ  
旨ヲ申末ル右ニ付此再度ノ尋問ヲナス本大臣

外務省

531 P.V.M. 1 472

一我卿大臣ノ了解難致故ヲ思考スルニ茲夕心ス  
 兩國修交ノ道ハ互相其便利ヲ通シ能ク彼此ノ人  
 民ヲシテ隣國ヲ失ハシメス以テ其福祉ヲ増シ且  
 ソ友誼ヲ厚クスルニ在ルヲ貴公事ヲ以テ主要ト  
 ナスヘク蓋シ我政府ハ情修好ニ切ニシテ固ク修  
 規ヲ重トスルハ勿論ノ儀ナリ然レトモ兩國ノ  
 指ヲ觀ルニ缺レ元自歩ノ國ナルヲ以テ公港ニ遊  
 ハスハ爲スヘカラサルノ事ナレ<sup>目</sup>下兩國同意ニシ

外務省

532 P.V.M. 1 473

百ニ便利ヲ通シ以テ民歩ニ惠ミ而シテ修好ノ  
 實ヲ行ハント欲シナカラズ夕修<sup>物</sup>年限ノ一箇條  
 ニ抵觸スルヲ以テ意ニ折格致ニ舉行シ得スニシテ  
 峻拒セラル故ニ卿大臣ハ貴政府ノ意果シテ那  
 辺ニ在ルヤト思ハルナルヘシ夫レ別段ニ特約ヲ  
 結フハ將ニ其條規ヲ保存シ並ニ行テ修好ヲサシ  
 トトスルハ固ク天下一通例タリ我國ハ誠ニ貴  
 國ノ自歩ヲ以テ此特約ニ終ケル必喜<sup>ク</sup>之ヲ成

外務省

533 P.V.M. 1 474

送  
付  
書

甘ト信シタルカ故斯ク領利ニ及ヘルニテ及ヤ領利  
 ニ及ヘルニテ及ヤ領約締中ニアル彼此人民ヲ均  
 ク其居住地方ノ法律ニ歸セシメトト一層ハ正サ  
 ニ兩國自ラ奮ヒ從前失ヘル自國ノ權柄ヲ恢  
 復セト欲スルニテ更ニ緊要トス即チ我國ニ  
 テ此ノ特約ヲ結フモ亦タ兩國ノ自歩ヨリ出ルニテ  
 何ノ不可アラレヤ故ニ本大臣ハ毎不ニ其ノ貴國ト  
 他ノ各國トノ間ニ於テ決シテ障礙ヲ歩スルノ懸

外務省

574 P.V.M. 1 475

ナシト謂フ也因テ貴大臣以上陳述セシ情理ヲ再  
 龍精細ニ思考アラハ只タ特約ノ在否ヲ善考ト見  
 做ス可已ナラス又必ラス之ヲ果斷施行スルノ地ニ  
 進マルヘキヲ冀望ス若シ本大臣不存ニシテ終ニ權  
 自セラルルナラ其理由ヲ明カニ裁復アレ特トニ  
 再ヒ言ヲ盡シテ忠告ス、

以上

外務省

535 P.V.M. 1 476

2-1245

(右漢譯文)

再論訂特約事節略

春冬備文擬請兩國另訂特約一事 旋准  
 貴王大臣復稱 兩國辦事既有條規章程既  
 則可循 彼此止應遵中邦諭 卽係同教和  
 好之實案因 隨將修復文件照錄 回明本者  
 去後 昨接外務大臣咨開 茲查擬訂特  
 約文件 清國政府 初嘗以爲意非不美

外務省

536 P.V.M. 1 477

面乃墨中條規 斤不見標採 似失修好之實  
 本卿大臣殊不解也 仍蒙閣下再行討論  
 妥爲徵復等因 准此 合爲再請  
 鑒教 本大臣思我卿大臣所不解處 亦必以  
 兩國修交之道 貴在互相通其便利 能使  
 彼此人民 不失時機 以增福祉 以敦友誼  
 爲最款要 蓋我政府 請切修好 固第條規  
 是不待言 然觀兩國大 均由自步

外務省

537 P.V.M. 1 478

2-1245

不違公法、死不可辱、且下兩國同意、思欲互通  
便利、以惠民生、而行修好之策、特以抵  
融修約期限一條、意致扞格不爭、而見後推  
故卿大臣殊未審貴政府果何意也、夫另訂約  
者、將以保存修規並行不悖、固為天下通  
例、我國誠信、

貴國自主、於此特約、必喜成之、故爾請  
款、以該約稿所有彼此人民均歸所修地

外務省

方法律一層、正欲兩國自奮、恢復從前所失  
之自主國權、有何不可、故本大臣每聞其於  
貴國與別外國間、並無障礙難之患也、惟

貴王大臣、再為細考上所陳述情理、不止以精  
約之意為善考而已、又必可以果斷施行、  
若本大臣不察、終見橫暴、續煩將其理由、  
明傳

外務省

2-1 245





590505

可ナリ  
 本林  
 此節略暫時借覽ヲ許サレシヤ  
 高ル事数語而曰  
 沈桂芬之ヲ接シ各大臣ト共ニ之ヲ閱シ各相  
 ト節略ヲ沈桂芬ニ交ス  
 終ヲ審シ携ヘ来レリ請フ米ヲ之ヲ饋フ  
 テ饋別也シ特約一條ニ係レリ乃チ茲ニ其節  
 略ヲ審シ携ヘ来レリ請フ米ヲ之ヲ饋フ

外務省

542

P.V.M. 1

483

別紙口錦  
 特約節略記  
 明治十年三月十八日森公使総理管内ニ於テ  
 設別郵書記官通譯  
 総理大臣 毛董 沈景夏及総辦貳名  
 列席  
 森公使開談  
 今日特ニ来テ面商ヲ要スル所ト云冬節日

外務省

541

P.V.M. 1

482

2-1245

0094

590506

沈

本條約ヲ除クノ外此等特約ノ如キハ必シ  
モ批准ヲ要セサルモノニテ各外邦ニシテハ  
常ニ之ヲ行ヘリ貴國モ亦必ス然ルヘシ

森

ノ意ヲ傳ヘラレタレハ必ス欲利ヲ要セラ  
ルルヲ信ス閣下ニハ曾テ既ニ答過セシト  
雖トモ尚ホ重ネテ高議ヲ盡スヘシ

外務省

544

P.V.M. 1

485

沈

ノ間快ヲ之ヲ行ハシ事ヲ希望ス

森

面ニテ答復スヘシ

沈

然ラハ第ト高議ヲ盡シタル上ハ追テ書

然リ閣下此度ハ更ニ貴外務卿大臣

外務省

549

P.V.M. 1

484

2-1245

0095

590507

沈  
然リ各國其例アリ余ハ只我邦ニ終ニ至  
テ少シト言シ而已閣下ノ言ハ甚是ナリ  
森  
凡ノ事預メ之カ備フ爲ストキハ事至ルノ  
日之ヲ解スル事甚易シ已ニ事ヲ決ス  
ルノ後遠カニ之ヲ議スルハ美事ト爲ス  
可ラス此辨約又即チ此意ニ出タリ列

外務省

546

P.V.M. 1

487

森  
凡ヲ新タニ議セシ事有テ之ヲ條規ノ外ニ添  
立セシ事ハ数回ナレトモ條規ノ意ヲ翻ヘシ  
テ之ヲ改訂セシ事ハ至テ少シ  
然トモ必又改訂セサル可ラサル事アリ何トナ  
レハ條約ノ期限ハ頗ル長ク而シテ事ト務  
ト其間ニ変更スルヲ以テナリ如此トキハ隨  
時之ヲ改メサル可ラス

外務省

545

P.V.M. 1

486

2-1 245

0096

590508

此特約ハ彼レトハ異ナレトモ他日或ハ彼ニ  
 類スルノ事然チ保タサレハ父是ヲ預  
 防セサル可ラス

沈

貴國ニテ事ヲ辨セラルルハ總テ情ヲ覺  
 リ得テ推スニ本ク故ニ向後復タ台湾ノ  
 事ノ如ク件ナキヲ信ス 因テ又徵晒シニ  
 日クハ日海ノ談ヤ先帝兩大人ノ殊ニ之

外務省

548

P.V.M. 1

489

位大人ノ諒知ヲ蒙ル

沈

西國ノ交際ニ於テ迭ニ相強ル事無ク  
 能ク相体諒シテ事ヲ成サハ何ノ不可力  
 之レ有ラシ

森

向ニ台湾ノ事ニ因テ大ニ船輪ヲ費セ  
 リ是レ兩國ニ於テ甚ク望ム所ニ非ス

外務省

547

P.V.M. 1

488

2-1245





39 〇在清森公使ヨリ并島外務卿宛

明治十二年四月 五日付

同 年同月十五日受

日清兩國間ニ特約締結ノ件ハ清國

政府不同意ノ爲談判不調ニ終リタル

七日報告ノ件

別紙第三號

特約新訂ノ義過日總理衙門ニ交付ハセシ

外務省

550

P.V.M. 1 491

節略書並ニ當日談論ノ趣算ハ已ニ且答  
 ヲ經候所去ルニ日別紙「ハ」號ノ通談大臣ヨリ  
 同意難致旨答復シ来候元来舊規ヲ墨守  
 之ヲ随時改良ノ意ナキハ清政府ノ舊態ニ  
 ハ申述ニ無ク之候孰ラ其深意ヲ察シ候ハ  
 ハ清國ヨリ我國ハ公使領事等派出ノ件ハ我  
 國在留ノ清國高民ノ屢懇請セシ面セナラヌ  
 事日没清ノ我官員中ニテ希望スルノ意ヲ

外務省

551

P.V.M. 1 492

表也之者不少又台湾事件以来时勢之ヲ要也  
 之ヨリ遂ニ該官吏ヲ降置スルノ際忽チ此事  
 ノ誤判ヲ後候ヲ以テ惶惑心ノ念ヲ起シ特約ヲ  
 拒ムノ勢ヲ爲ス力如ク相見エ此上如何程辦  
 論ヲ盡シ候共到底徒勞ニ属シ候ニ付乃  
 少別紙「口」弭寫ノ通ノ書翰相投シ致シ  
 再々之修復ヲ要セシ惜其昏迷ヲ大時警  
 醒ニ以テ此ノ一局ヲ了結候畢竟奉答ノ件

外務省

貫徹ヲ不得ハ遺憾ノ極ニ候得共其頃々  
 存テ察ムルニ有ク萬々不得已候乍然西細亞  
 湖中我政府独リ國權ヲ挽回スルニ洋員シ  
 僞ニ先鞭ヲ着リ清政府ヲ鼓興セシト也之事  
 其成不日ニ聞ヒラス天下後世ニ對シ教令ノ榮  
 譽ヲ増候ハ然疑事ト存候尤右「口」弭寫  
 文ノ末段ニ兩國高民ハ凡終准各個人所獲  
 益処然不同沾等ノ文ハ兼テ御下命有

外務省

2-1 245

590511

之候會同審判ノ制度ヲ我國ニシテハ除カ	シ傳ニ謀リタル義ニ有之候	右申答候也	北京	明治十年四月五日	森有禮	并島外務卿殿
--------------------	--------------	-------	----	----------	-----	--------

外務省

554

P.V.M. 1

495

2-1245



恩欲互通便利、~~特~~以抵融修約期限、  
 并格不奉、未審何意、約稿所有彼此人  
 民、均歸所修地方法律一層、出兩國自主、  
 與別國並無礙難等情、本王大臣於此節、  
 並非如  
 貴大臣節略所謂不見採、更無所謂終見  
 橫斥也、兩國辦事、彼此皆平心相允、如  
 係

外務省

556

P.V.M. 1 497

再行討論、  
 貴大臣以兩國修交之道、貴在互相通其便利、  
 兩國事務、均由自主、且下兩國同意、  
 國另訂特約一事、昨接外務大臣次日原  
 貴大臣面~~議~~節略、以答冬備文擬請兩  
 光緒四年正月六日奉  
 (別紙不錄)  
 (清國政府覽書)

外務省

555

P.V.M. 1 496

2-1245

則心不併修好條規爲通方、所夢者細胡何、  
 備事爲彼此相回顧、而章穆亦其條規無相  
 悖之處、平心合意、同求便利、每遇修  
 約之期、便可高辨、如利於彼國、不利於此、  
 便於彼國、不便於此、無論非修約之期、  
 難於更張、卽若期滿修約之期、彼此和好  
 爲實、雖肯相強爲哉、所有彼此人民、均  
 歸所修地方法律一層、我兩國原有自步之

558

外務省

貴大臣所謂兩國同意、思欲互通便利之事、然  
 不意願悉心相商、卽  
 貴大臣亦指兩國同意之事而言、亦非謂一  
 國願、一國不願之事也、其所以不願之故、  
 亦必有艱難情形、勢難相強、若遠目爲積  
 弊、謂爲久修好之策、豈其然乎、我西  
 國相交、以修好條規爲障礙、此中國之所夢、  
 貴國亦此爲夢矣、若以通修好條規爲障礙、

557

外務省

2-1245





(右野譯文)

光緒二十一年三月十六日(我二十一年三月七日)貴大臣ヨリ  
 面達セラレシ節略書ニテ昨冬照會ニ及ハレタ  
 ル兩國ノ間ニ別ニ特約ヲ結フ銀判一件ニ付  
 此特約外務大臣ノ末書ニ福一應ノ討論ニ及フハ  
 キ七日ヲ申付テ之ニ因リ貴大臣ニテハ兩國  
 修好ノ道ト互推其便利ヲ通スルニ在ルヲ貴  
 ハ兩國ノ大權ハ孰レモ自主ニ係リタレハ兩國

外務省

同意ニテ互ニ便利ヲ通セテ事ヲ欲セシニ只  
 夕條約改定ノ期限ニ抵触スルヲ以テ并格イタ  
 ニ奉行セサルハ抑何ノ意ソヤ且特約書本ニ  
 掲ケタル彼此人民ヲ互ニ所住地方ノ法律ニ属  
 セシムル儀ハ兩國ノ自主ヨリ出ル事故別國ノ  
 決シテ困難無ク之トノ趣ヲ承知セリ  
 本大臣此一件ニ終テ貴大臣ノ節略中ニ申述  
 ラレタルトクテ採用セズ又終ニ積斥セラル

外務省

2-1245

ト云ルル儀ハ毛頭無之ナリ  
 兩國ノ間ニテ事ヲ辨スルニ彼此何レモ心ヲ平カニ  
 シ集ヲ和ラケ若レ其ノ事カ貴大臣ノ謂ハルル通  
 リ兩國同意ニテ互ニ便利ヲ通スル儀ナラハ心ヲ  
 盡シテ相談スルヲ願ハサルハ無シ即チ貴大臣  
 モ亦々兩國同意ノ事ヲ指テ言ハレル決シテ一  
 國ハ願フトモ一國ハ願ハサル事ヲ謂ハルルニハ  
 非サルヘシ

外務省

其ノ願ハシク無キ旨ヲ申ス上ハ亦々テス礙難ノ情  
 形モアリテ是非トモト相強ムル可ラサルナリ若  
 シ是ヲ経手ニ目シテ權下ト爲シ修好ノ實ヲ失フ  
 モト謂ヒ爲サハ豈其レ然ラレ乎  
 我ラ兩國相交ハルニハ修好條規ヲ以テ遵  
 守スヘキモノトスルハ此レ我カ國ノ當レスル所ニ  
 テ貴國モ亦々當トスヘキモノト爲リ若シ修  
 好條規ニ遵フヲ以テ墨守スルト爲サハ則

外務省

ナハス修好修規ヲキラサルヲ以テ通方ト爲  
 セルニテ其ノ事ノスル所ノ者ハ何クニ在ルヤ  
 若シ其ノ事力彼此共ニ頼フ所ニシテ其章條モ  
 亦々條規ト相浮ル処ナク心ヲ平カニシ意ヲ  
 合ハセ同ク便利ヲ求ルナラハ條規改定ノ期  
 限至ル毎トニ随令商量辨理ス可シ  
 若シ彼ノ國ニ利アルトモ此國ニ不利ナルカ彼ノ  
 國ニ便ナルトモ此國ニ不便ナル事ナラハ條約

外務省

改定ノ期限至ラサル前ニ之ヲ更張シ難キハ  
 句輪假令條約改定ノ期限ニ至レル時ニ於ル  
 トモ彼此和好ヲ重シト爲セハ何ク強ヒテ爲  
 スヲ肯セレ哉  
 且ツ彼此ノ人民ヲ均ク所修地方ノ法律ニ當セ  
 シルノ一件ハ或ラ兩國原ヨリ自主ノ權アリ  
 テ各開港地ニテ事ヲ辨スルニハ畫一ノ法ナ  
 中事能ハス若シ他國人ヲ管轄シ得スニテ貴

外務省

2-1 245

國人ニミ管轄ヲ施ス事地方官吏ニ終ニ滿  
 從スル所ナシ他國人ハモ皆ナ此例ノ如ク從ハシ  
 メン事ヲ欲セハ則チ貴國ニシテ之ヲ他國人ハ  
 行フ能ハサル所ノ者ハ我國モ亦タ以テ各國  
 人ニ行ヒ難シ此レハ權ノ自步スル能ハサルニ非  
 ス乃チ政ノ兩岐スル能ハサルハ也  
 貴國高民ノ我方國ニ在ル者ハヤヤ少ク我國高  
 民ノ貴國ニ住ム者ハ甚タ多ク我ラ兩國ノ修

外務省

好條規モ亦タ皆ナ聞見ヲ經タレハ若シ今  
 更ニ替リシ辦法ヲ立テナハ條規ニ言ヒテ所  
 トモ違ニ違ヒ其ノ中々事ヲ辨スルニ至難  
 出来スルハ困ヨリ免レサル所ナリ且ツ我國ニシ  
 ハ貴國ニ據居セル我國ノ高民ニ信義ヲ失  
 フノ理ニ有之此レハ則チ事ヲ我國ニシテ碍難トス  
 ルノ情形ニ就テ之ヲ言ヘルニシテ亦タ貴大臣ノ執  
 思シテ洞悉セラル所ノ者歟ニ貴大臣ヨリ再

外務省

2-1245



590519

後相詢ナラレルルモノカラ切實ノ答ヲ爲ササルヲ  
得ス、因テ貴大臣貴國ト其モニクヲ深誌アラシ  
身ヲ北異フ。

別紙同部

外務省

574

P.V.M. 1

511

2-1245

590520

亦知之。惟我兩國自昔日平土而乃為首開  
 文物之邦。因未。道賢守黃之大具織俾  
 千一。以致欲竟域人逼成約情所為。而弗  
 知其權柄之何在焉。當開紀業征伐自天  
 子出。而仲外人敢用其法於我封疆之內。至  
 以逼成之章自甘越守一如聖經神典者。未  
 嘗不歎息痛恨千昔者所為。本大臣以渴  
 盤日新不憚改昨非從今是。此道且下高國

外務省

592

P.V.M. 1

513

別紙口野  
 森公使より總理兼大臣宛照會  
 送答有。昨閱  
 貴王大臣答復節略之言。迺知前本大臣自謂也  
 皆之竟有未能暢達者。故不得不一再為我  
 兩國漣情剖陳以表所謂修好之實。夫為國  
 者今不喫人匯方為有權自步。豈春他人以  
 不便利之事相據哉。此等道理本大臣

外務省

591

P.V.M. 1

512

2-1245

第一色一岐世所難同。所以古人不免悲泣。今我  
 兩國並與秦西涉東。口稱中外一家。至於政  
 刑涉聽彼來行權此國。不泣天有兩岐乎。  
 夫失已物于人。尚須賠費取還。今我兩國自  
 欲權歸一律政不兩岐。非有捨此取彼之志必不  
 可得。本大臣所致力圖裁陔者刑罰者。將  
 使兩國高民中心悅服歸之。自知各國各有大  
 權彼此一等。不敢相犯。皆有實至如歸

外務省

574

P.V.M. 1

515

通行。故敢高終  
 貴王大臣。正冀平心和氣彼此合國。以播穆終今  
 日而大振作干將。來為漸進同遠同之之地。  
 山皇料  
 貴王大臣終不見諒。但以中國未願之事能肯環  
 為。貴國所不能行於他國者中亦難行於  
 各國。非特不能自步乃政不能兩岐云久為眾  
 自分未可共之言而善失言。徒嘆奈何而已。凡

外務省

573

P.V.M. 1

514

2-1 245

貴國者。皆續修好條規。今更另立辦法與條  
 規迥異。辦事窒礙。且失信于商民。則孰  
 與失治疆土大權于君國者。若港所請。豈  
 貴國商民之在我國者免稅較多。以當政刑日寬  
 一日。居之安者更不多乎。古云言不必信行  
 不必果惟義所在。亦復奚疑。是即本大臣  
 盡滿腔熱心。更代本國陳於  
 貴王大臣以明心蹟耳。事既礙難奉行。豈

外務省

576

P.V.M. 1

517

始安有繼者。故爾鑄款是為和好。本大  
 臣與本國所慮在此。而  
 貴王大臣所慮在彼。即或以為便利及成不便  
 不利。即求同竟相謀及似相強壞和。而終  
 止于礙難一言。然他。更坐落終逼成之章  
 故也。若謂貴國商民之在我國者多於我國  
 商民之在

外務省

575

P.V.M. 1

516

2-1245

590523

中堂  
王爺台答  
大人

外務省

598

P.V.M. 1

519

敵相強。自德併牙再議。終結修好之策可也。至於兩國商民之在彼此營業者。凡於准各  
國人所獲益處。無不同語。以昭劃一。併此  
聲明。諸君  
鑒察。順頌  
日祉。

四月四日

森有禮

外務省

597

P.V.M. 1

518

2-1245

0114

590524

及了結ノ書函ニ復答シ別紙ノ通總理衙門ヨリ申  
 束候ニ付抄録呈覽候此書函ニ付本使此地ニ  
 於テ盡力可致條々候ハハ至急勅命ヲ仰候尤  
 會同審判ノ事ハ其地ニテ清國ノ公使ハ談判有之  
 方ト存候  
 右申答候也  
 明治十一年四月十九日  
 北京  
 森 有紀  
 外務省

580 P.V.M. 1 521

40 在清森公使ヨリ青島外務卿宛  
 明治十一年四月十九日 付  
 同 年五月九日 受  
 (日清兩國間特約締結ニ関シ清國政  
 府ヨリ照覆ノ件)  
 別紙第四號  
 (備考誌、五月ノ談記ナラシ)  
 本月四日付第三號信ヲ以テ呈上置候特約云  
 外務省

519 P.V.M. 1 520

2-1245



590525

(編者註)

此公使ハ外務省ニ於テ接交ノ儘ニテ其後別  
ニ訓令ヲ發シタルコトナク又森公使モ帰朝ニ  
特約問題ハ交渉成ルニ至ラスシテ其旨ト  
成リ終リ。

外務省

589

P.V.M. 1

523

2-1245



590526

披閱來函言之諄諄具見  
 貴大臣篤於誼之忱惟彼此均係推誠相共  
 有不妨盡相告者  
 貴國前派  
 伊達各大臣等前來中國與本中堂議訂修好  
 條規係將兩國所願之事儘皆商論竟見  
 相同始終擬定並非由於逼而成夫兩國辨  
 事果係兩國皆願自然兩國能行毫無礙

外務省

584

P.V.M. 1

525

別紙  
 總理衙門王大臣ヨリ森公使宛照覆  
 逕復者本月初二日准  
 貴大臣來函以忠告之意不能相諒即奉同意  
 及似相強終終礙難一言坐格於逼成之章事  
 既礙難舉行自應待年再議終請修好之策  
 至於兩國高民之在彼此當業者凡於准各國  
 人所獲益地無不同沾次照劃一等因本王大臣

外務省

583

P.V.M. 1

524

2-1245

590527

貴大臣心察之為荷順頌

日社

三月十五日

森大人 台 答

外務省

586

P.V.M. 1

527

難修好之使然過於是如有交通章程之知而  
國均無礙難原可彼此隨時商辦毋須限以  
事修身分若一國稍有礙難無論是否事修之  
年彼此欲以知好為事能肯相強此層已於前  
復以節略內聲明

貴大臣易地以思諒有同情至兩國商民在彼此  
營業者自應一切按照條規章程辦理以  
無失信守勻諭之意事此佈復尚希

外務省

585

P.V.M. 1

526

2-1245

外務省  
 照會ノ末左ノ條ニ取極候事  
 一  
 一、條有之候ニ付日本駐劄欽差大臣何如  
 貴首ハ御達相成候然ル知右ニテハ猶不明  
 六月廿一日甲寅第十號ヲ以正院ハ上申之其旨  
 彼政府才中テモ承諾候ニ付其儀ハ明治廿  
 ルモ本國金トシテ毎斤洋銀十五元ヲ課スル旨  
 附王大臣ノ照覆ヲ以凡三斤以上私載者賣不  
 コリ清國政府ハ照會之清曆光緒二十一年正月十八日

588

P.V.M. 1

529

外務省  
 照會ノ末左ノ條ニ取極候事  
 一  
 一、條有之候ニ付日本駐劄欽差大臣何如  
 貴首ハ御達相成候然ル知右ニテハ猶不明  
 六月廿一日甲寅第十號ヲ以正院ハ上申之其旨  
 彼政府才中テモ承諾候ニ付其儀ハ明治廿  
 ルモ本國金トシテ毎斤洋銀十五元ヲ課スル旨  
 附王大臣ノ照覆ヲ以凡三斤以上私載者賣不  
 コリ清國政府ハ照會之清曆光緒二十一年正月十八日

587

P.V.M. 1

528

2-1245

590529

一 各種藥名ニ至ッテハ清國米々管ヲ  
 此物ナシ云々  
 一 犯則ニ付取立候罰金ハ清國銀事ヨリ裁  
 裁関へ引渡候事  
 一 吸烟器具ハ吸烟ノ現犯ヲ見留サルト  
 毛領事ノ裁判ニヨリ之ヲ裁関ニ取揚  
 裁却スヘシ組右器具タル紙外吸烟用  
 一 外他ニ使用スヘカラサルモノクヲ吸烟

外務省

590

P.V.M. 1

531

一 鴉片ト稱スルハ吸烟藥用ノ辨別無之  
 護鎖越新及鴉片ヲ元質トシ傳々  
 ノ藥名ヲ換用スルトモ錠テ阿片タルヲ  
 免レサルモノハ右ノ名目中ニ含有候事  
 右ニ付清國公使ノ答文中ニハ數年前ヲ經  
 サルモノクヲ烟去ト謂ヒ其已ニ數年前ヲ  
 經タルモノクヲ烟膏ト謂フ此ニ  
 據ハ應サニ罰ヲ議スヘシ鴉片所製

外務省

589

P.V.M. 1

530

2-1245

590530

之其他情長各房室内ニ在リテ吸烟ノ現犯ヲ  
 認ムルモノハ我州羅ノ官之レヲ取押ヘ請願  
 事へ引渡シ領事ハ之ヲ拘留シテ便船次第  
 本國へ送還シ再度日本へ渡来ヲ許ササル事  
 ニ約定候條右ノ開市地方官へ相違候得共  
 前書税関ノ務ノ條ノ各開港場税関へ御  
 布達有之度候也

明治十年九月 日

外務省

592

P.V.M. 1

533

右ノ事ヲ税関吏員ヲ注意ニ關係候事ニ存  
 スルノ權ナシ  
 是ト定ムルニ非サレト之ヲ取揚減却  
 申入領事裁判シテ紙幣ノ吸烟器  
 依テ其鑒別ヲ要スル係領事館へ  
 器具ノ搬シテ吸烟用ト差定メ難シ  
 毛シ或ハ然ラズ他ノ事ニモ轉用スル中  
 烟用ト紙ニ取揚減却ノ等ニ及フヘシ

外務省

591

P.V.M. 1

532

2-1245

590531

柳ヲ按シテ乱辨スヘシ云々(其通商章程第九  
 款ニ日ク(納税ヲ道レトスル者アラハ海關ニ  
 リ取調規則ニ依テ計フヘシ)第十四款ニ日  
 ク(上略)(背ク者ハ其品何レモ官ニ取上ル本人ハ  
 理事官ニ引渡シ処置スヘシ)第十五款ニ日ク  
 (上略)(其品物ハ何レモ官ニ取上ル本人ハ理事  
 官ニ引渡シ処置スヘシ云々)第十七款ニ日ク  
 (上略)(大日本ニシテハ品物ヲ官ニ取上ル洋銀一千元

外務省

594

P.V.M. 1

535

事件ハ御テ其裁判ニ歸シ何レモ自國ノ律  
 フナスヘシ凡策財產業ハ公事訴訟ニ干係セシ  
 ハ彼此何レモ理事官ヲ差置キ自國商民ノ取締  
 和清修好條規第八條ニ日ク(兩國ノ開港場ニ  
 ニ関シ問合ノ件)  
 清國理事官ノ裁判權ト我領関ノ処分權  
 明治十一年十月十五日 付  
 420大隈大藏卿ヨリ青島外務卿宛

外務省

593

P.V.M. 1

534

2-1245

0123

590532

文竟ニ概レハ犯人ヲ処分スルハ理事官ノ權  
 ニ在リ而シテ犯物ハ我之ヲ処分スルノ權ヲ有ス  
 ルニ似タリ又第二十七款ノ場合ニ於テハ夫々処  
 分ノ後理事官ノ心得止ニ其旨ヲ同官へ通知  
 スルニ似テ該処分ニ就テハ理事官ノ權内ニ  
 アラサルノミナラス敢テ條ヲ其間ニ容ルルヲ得  
 ガルニ似タリ其他該條約第十四第十七條及該  
 章程第五第六第七第十第九款等ノ如キ

外務省

596

P.V.M. 1

537

何レモ心得ノ爲メ理事官ノ場合ニ知ラス(シ)  
 ト有之在夫々若竟候処彼我聽訟ノ義ハ  
 別然致第候得共第八條ノ竟ヲ鎖ルニ理  
 事官ノ審判ス(才新訟ハ時ニ兼財産業ニ干  
 係セル事件ノミニシテ該章程第九款ノ如  
 キ場合ニ於テ人物人共海關限リ処分致可  
 然候相見ハ候然レトモ又第十四款第十五款ノ

外務省

595

P.V.M. 1

536

2-1 245

トキハ清國商民貿易違犯ノ審判ノ如キハ  
 經令理事官ハ在留セシ港ト雖モ從來ノ通例  
 役限限リ如令致シ第十四第十五及第二十七款  
 等ノ如キ理事官ハ干渉スル令少在取針  
 候テ可然義ト存候得共前後ノ文意利如  
 致兼候兼モ有之候條此段御照會又候條  
 至急御回函相成度候也

明治十二年十一月十五日

大藏卿大隈重信

外務省

598

P.V.M. 1

539

ニ至テハ單ニ荷物ヲ取上クヘシトノミニテ理事  
 官ノ審判ニ滞スルノ明文モ無之又理事官ハ照  
 會スルノ明文モ不相見一休歐米各國條約書  
 中ニハ罰金ヲ取立或ハ物品ヲ取揚ル事ハ其  
 領事ノ裁判ニ因ルヘシ云々ノ一款掲記有之  
 候ニ付彼領事於テ其裁判權ヲ掌握セル事  
 判然致候得共和清條約書中於テハ如此  
 ノ條款モ無之在等ノ如キ第ヲ次勘考候

外務省

599

P.V.M. 1

538





追三本文ノ通貿易違犯ノ罪ハ果シテ理事官  
 ノ干渉スル所ニ無クト申ハ本年九月中御有様  
 第貳百八拾七號ヲ以御申越相成候清國商  
 民鴉片輸入ノ節処罰方ノ内(犯罰ニ付取立候  
 罰金ハ清國領事ヨリ我役関へ引渡云々)  
 又(吸烟器具ハ吸烟ノ現犯ヲ見留サルトモ  
 領事ノ裁判ニ依リ之ヲ牧関ニ取揚減却  
 ス(云々)ト有之候得共在ハ彼我ノ條約

外務省

二抵觸致候様相有候其如何ノ義ニ候哉  
 御説明有之度此段申副候也

外務省

2-1245

外務省  
記録  
明治三年  
三月  
月  
日

曰清修好通商条約締結一件  
柳原権太丞不刊大録清国去來前書類

第  
卷  
2  
5  
1  
6-1

自  
明治三年  
年  
三月  
月  
日  
曰清修好通商条約締結一件  
柳原権太丞不刊大録清国去來前書類  
第  
卷

2-1 2 4 5